

第 6 章 小樽オルゴール堂・北一硝子

松谷姫那

6.1 小樽オルゴール堂について

6.1.1 オルゴールの歴史・語源

オルゴールの起源は、中世ヨーロッパのルネサンス期にさかのぼる。当時教会の時計塔には時間を知らせるために大小の鐘を機械仕掛けで鳴らすカリヨンと呼ばれるものがあった。人々はこの街中に響き渡る『天上の音楽』をこよなく愛したため、何とか卓上で再現できないかと様々な技術の開発、発見がなされオルゴールの原型が完成したのは 18 世紀末のことである。

日本にはじめてオルゴールが伝わったのは 1852 年、オランダ人によって紹介されたのが最初と言われている。オルゴールという言葉、これは日本語であるため欧米ではまったく通じない言葉である。日本では「オルゴールとは、手動または自動的に音楽を演奏する機械で、櫛歯に似た特殊銅製の発音体を回転胴に植え付けられているピンで弾き、自動的にメロディを奏でるもの」と定義しているため、シリンダーオルゴールとディスクオルゴールを合わせて示す。しかし実際にはオルゴールという言葉の概念は曖昧で、この言葉を広く自動演奏楽器一般を示すものとして用いられることがよくある。江戸時代、鎖国中の日本で、当時唯一接触していた外国人であるオランダ人によって紹介され、江戸深川で見世物となり、当時の人々を驚かした記録が残っている。その時日本人は楽器の機能や構造を理解することなく、ただ美しい音の出る木箱を「オルゲル」という名だと思っていた。さらにこの「オルゲル」が訛って「オルゴール」と呼ばれるようになった。

6.1.2 店舗

6.1.2.1 小樽オルゴール堂 本館

国内最大級のオルゴール専門店。1912 年に建てられた木骨造りの建物で「小樽市選定の歴史的建造物指定番号第 17 号」として認定されている。古き良き時代の小樽の歴史を当時のままに残し、本館前にある蒸気時計はカナダの時計職人(レイモンド・サンダース氏)により、カナダのバンクーバー市の観光名所「ガスタウン」に 1977 年に作られたものと同型で、高さ 5.5m、幅 1 m、重さ 1.5 トンのブロンズ製。時計は電動式となっているが、コンピュータ制御により、ボイラーで蒸気を発生させ 1 時間毎に時刻を告げるほか、15 分毎に蒸気で 5 音

図 6-1 小樽オルゴール堂本店



出所：小樽オルゴール堂 HP

階のメロディを奏でる。この蒸気時計は記念撮影の背景としても人気である。

図 6-2 北一硝子三号館



出所：北一硝子 HP

6.1.2.2 小樽オルゴール堂 2号館

小樽オルゴール堂 2号館では当時のままの歴史的にも価値のある数多くのアンティークオルゴールやからくり人形の展示とそれらのミニコンサートを行っている。また、店内ミュージアムショップでは日本やスイスなどのまるで楽器のような音楽性を持つオルゴールや音質にこだわったオルゴールから身近に楽しめるオルゴールまで厳選して取り扱っている。

6.1.2.3 小樽オルゴール堂 ギヤマン倉庫

ギヤマン倉庫の「ギヤマン」という言葉はオランダ語の『ディアマンテ』という言葉から生まれたビードロと同じくガラスを総称する言葉である。そこから命名した「ギヤマン倉庫」ではビー玉、ガラス小物をはじめ照明、食器までガラスを素材やテーマにした商品を数多く取り揃えている。

6.1.2.4 小樽からくり動物えん

その名の通り「動物園」をテーマにした動物園の専門ショップとしてあらゆる年代の人に愛されている。本物のように動く動物たちをはじめ、全体が動物園のような雰囲気でもいぐるみや温もりのある木のおもちゃ、遊び心溢れるかわいいステーションナリーなど色々な種類のおもちゃが勢ぞろいしている。

6.1.2.5 キャラクターハウス・夢の音

小樽で唯一のキャラクターオルゴールの専門店である。さらに 2 回は道内最大規模のジブリ映画グッズ専門フロアがある。

図 6-3 シリンダーオルゴール

6.1.3 オルゴールの種類

6.1.3.1 シリンダーオルゴール

シリンダーオルゴールは 1795 年スイスのジュネーブの時計職人アントワーン・ファールブによってベルとハンマーのないカリヨンの製作を成功させて、初めて世に出された。櫛歯を使い、ドラムに植えられたピンで弾くことで音を作った。1000 本から 2 万本ものピンを 50～100 分の 1mm の精度で植えつけるために職



出所：小樽オルゴール堂 HP

人の手に高い精度が要求された。音階を持つ櫛歯は硬い鋼が選ばれ、純正調と平均律の間、音に濁りのない調律法が選ばれた。オルゴールはムーブメントの金属の音、内部を見せる為に使われるガラスの音、そして最も重要な気の材質から影響されてオルゴール独特の不思議な響きを造っている。シリンダーオルゴールが透明で内面的な音を持っているのは、それぞれの材質を厳密に生かす職人たちの感性に負うところが大きく、それ故にそれぞれマイスターの持ち味の優れたオルゴールが生まれた。

図 6-4 ディスクオルゴール



出所：オルゴール情報サイト

6.1.3.2 ディスクオルゴール

シリンダーオルゴールは、一本のシリンダーで十数曲演奏できるものがあったが、シリンダーの製作には大変な手間がかかった。そこで、より多くの曲を手軽に楽しめるオルゴールが望まれ、1885 年頃にドイツの P. ロッホマンによって新しい楽器が実用化された。それがシリンダーの代わりに金属のディスクを使ったオルゴールで、ディスクオルゴールと呼ばれるようになった。音を出す仕組みは、突起がつけられたディスクが回転し、その突起がスター・ホイールを押し回して櫛の歯を弾くというものである。生産の過程もシリンダーは家内手工業な分業制度であったのに対し、ディスクはオルゴールのメーカー工場で大量に一貫生産された。こうした状況のもと、消費者の好む曲が次々とディスクに加工され、小規模ながら現代の音楽ソフトの市場とよく似た状況が生まれた。その意味でディスクオルゴールのディスクは、レコード盤の原型と言えるかもしれない。19 世紀の末から 20 世紀の初頭にかけて、主にドイツやスイス、アメリカで大量に生産され、ヨーロッパをはじめ世界中に普及した。

6.2 北一硝子について

6.2.1 ガラスの歴史

ガラス製品としての始まりは、紀元前 16 世紀頃古代エジプトの第 18 王朝時代、トトメス 3 世の名入りの脚付き杯などの遺物が最初のガラス製品とされている。エジプトのガラスはすべて色つきが不透明で、軟質のものが多く、原始的な方法で作られていた。

日本では正倉院のガラス玉を作る方法を書いた古文書から推定して、ガラス製造が中国や朝鮮から伝来したのは、1200 年前にさかのぼる。鎖国以後は、オランダ人によってガラス器が輸入され、「びいどろ」「ぎやまん」の名でもてはやされ、18 世紀には「江戸切子」が製作されて日本のガラス工芸が始まった。明治に入り品川のガラス工場で、英国人の手

によって窓ガラスの製作が始まり、1915 年ごろから量産されるようになった。

6.2.2 ガラスの素材

ガラスの成分は非常に複雑だが、普通 3 つの成分が柱となっている。主な成分の珪酸は普通のガラスの場合 70～75%を占めている。酸化ナトリウムは珪酸の原料である珪砂を溶けやすくする働きがあり、約 15%の含有量である。酸化ナトリウムは固まりやすくして耐水性を与える働きを持っていて、5%の含有量である。その特性によって加える成分が異なる。原料をミキサーに入れてよく混合して、るつぼやタンク窯に入れて、約 1200℃の高温で溶かす。こうして、美しいガラスとなるためのガラス種となる。

表 6-1 ガラス器の発色剤

色	原材料
赤	金、セリウム、硫黄
黄	セリウム、銀、硫黄
青	コバルト、銅
紫	マンガン、ニッケル
緑	クロム、鉄
乳白	蛍石、骨灰

6.2.3 小樽の文化と硝子の調和

小樽繁栄のルーツはニシン漁にあるが、明治に入り、北海道開拓が本格化すると、その玄関港として発展する。多くの開拓移民が小樽の上陸し、それを支える様々な開拓物資や生活用品を満載した北前船（弁財船）が集結し、商港としての発展基盤がここで生まれる。

1880 年に日本で三番目の鉄道が札幌との間に敷かれて、流通の要となった小樽では、港湾の整備がすすめられ、積荷を保管する木骨石造倉庫が次々に立ち並んだ。1899 年には開港場として指定され、国際貿易港になる。この時すでに営業倉庫は 250 を数え、うち石造倉庫は百棟以上もあった。

北一硝子の前身、浅原ガラスが生まれたのは、小樽函館間の鉄道工事が始まる前年の 1901 年のことである。初代社長の浅原久吉が、小樽で石油ランプの製造を始めた。電気が普及していない当時、石油ランプは必需品であり、さらに 1910 年には漁業用の浮き球の製造も始めた。現在ではライフスタイルの移り変わりと共に製品も変わっていき、今では暮らしを彩るテーブルウェアが中心となっている。

本州各地の古い都市には、長い歴史的背景があるが、小樽は、近代日本の夜明けに和の文化と洋の文化を同時に取り入れてスタートした町だといえる。それがまた、非常にグローバルな視点で展開したために、特異的な都市形成がなされた。このような小樽の成長過程を踏まえれば、都市を保存する重要な価値がある。スクラップ・アンド・ビルドによる安易な近代化から逃れ、個性を保持している小樽は、そもそもの経済の集散地であるとともに文化の集散地でもある。

6.2.4 店舗

6.2.4.1 北一硝子 三号館

北一硝子三号館は、木村倉庫社長、初代木村円吉により 1891 年に建てられた木骨石張倉庫である。この倉庫は時代とともにその役割が大きく変わり、当初は漁業用倉庫として、みがきニシンなど魚の加工品が納められていたが、ニシン漁の衰退とともにさまざまな物資が納められるようになった。

そし 1983 年に北一硝子三号館として改装オープンし、倉庫の特性を活かした内装で、ガラスショップや喫茶ホールとして営業を始める。通路には海までつながっていたトロッコのレールがあり、当時の名残を感じることができる。

6.2.4.2 北ーヴェネツィア美術館

イタリア北部に位置する「水の都」ヴェネツィア。北ーヴェネツィア美術館は、古都ヴェネツィアの古くから受け継がれた、豊かで潤いのある文化を紹介する美術館として、1988 年に開館した。一帯は北一硝子三号館をはじめ、さまざまな業種によって再利用されている石造建築物が建ち並び、かつて海産物、米雑穀、海運、倉庫業などの根拠地として繁栄を極めた歴史をほうふつとさせる。そこに大理石を外壁に張った 18 世紀ネオ・クラシック様式の宮殿「パラッツォ・グラッシイ」をモデルにしたこの美術館が、あたりの街並みにマッチしながらも、ひときわ目をひいている。地下 1 階、地上一部 5 階建てである。延べ面積 2700m² の 1 階は、繊細優美なヴェネツィアンガラスのアクセサリー、各種オーナメント（置物）、グラス、シャンデリアなどを陳列したガラスショップとなっている。2 階・3 階はヴェネツィアの宮殿内部を 10 の展示室に再現し、ヴェネツィアンガラスや家具は、歴史的な作品の国外流出が禁じられているため、往時の技法によって再現された作品を展示している。また、故ダイアナ妃が実際に乗ったゴンドラも展示され、ヴェネツィア製ドレスを着て記念撮影をすることができる。

6.2.4.3 北一硝子 クリスタル館

北一硝子クリスタル館では、小樽独自にアレンジした洋の暮らしや当時の贅を尽くした伝統的な和の暮らしを思わせる、クリスタル硝子の四季折々のテーブルコーディネートを行っている。1 階にはアクセサリーなど各種ペンダントのほかブライダルアクセサリーやメンズアクセサリーなど幅広く取り揃え、2 階には口当たりの良さを追求して辿り着いた極限の薄さが魅力の人気の「薄口グラス」や北海道の自然をサンドブラスト技法で実現したクリスタル館ならではの高品質のグラスを取り揃えている。

6.2.4.4 北ープラザ

北ープラザは、ヨーロッパの文化と現代の暮らしを調和させる舞台として、ヨーロッパスタイルのガラスのアクセサリーや、食卓を彩るグラスやプレート、暮らしを楽しむインテリアアイテムを取り揃えている。

6.2.5 ガラスの種類

6.2.5.1 ソーダガラス

原料に石灰を多く入れる。ごく一般のガラスがこれで、屈折率が低くやや透明感に欠けるが、硬い性質を持っている。安価であるため、広く窓ガラスや瓶などに使用される。

6.2.5.2 クリスタルガラス

ソーダガラスの石灰の代わりに酸化鉛を使用する。12%から 35%くらいが標準である。屈折率が高く透明感があり水晶(クリスタル)のように輝く透明なガラスになることから、通称として「クリスタル」と呼ばれる。やわらかいのでカットなどの加工しやすい性質をもち、高級・装飾向けのガラスの代名詞として様々な食器ブランドに利用される。

図 6-5 カリガラス



出所：ウィキペディア

6.2.5.3 カリガラス

ソーダの代わりにカリウムを使ったもので、ソーダガラスと同じような性質を持っている。やや硬めで透明感が高い性質を持っている。彫刻などを施すのに使われる。

参照 HP

小樽オルゴール堂

<http://www.otaru-orgel.co.jp/>

北一硝子

<http://www.kitaichiglass.co.jp/index.h>

小樽観光スポット

<http://www.mazda-rentacar.co.jp/hokkaido/otaru/kanko/sightseeing-orgel2.html>

北一ヴェネツィア美術館

<http://kamuimintara.net/detail.php?rskey=51199207t01>

ウィキペディア

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%BD%E3%83%BC%E3%83%80%E7%9F%B3%E7%81%B0%E3%82%AC%E3%83%A9%E3%82%>